というところからスタートした。
養護教諭を含め、全部一丸となってやれ
1. 教職員の意識をどう高めるか
2. 机上の学習のにならないように。思い切って外へ出しましょうといっている。校長はいやがる。学校の開放か
3. テーマ制　21世紀の課題　平和　環境　生命など
小学校の総合学習とどこが違うのかを出そうとした。
評価観点をどうするか非常にもめる。生きる力はなかなか推し量れない
有る程度基本的に打ち出せたと思う。

＊5年間に我々が生徒から学んだものは何か。
教師が生徒から学ぶ。生徒と同じ土俵でやっていく。
生徒は教師に自慢できることがままある。
高校入試のプレッシャーをなくすといいものができる。
自分の人生を選択することにつながっていく。それがないとただの徘徊主義、－－になっていく。
今の生徒はグループ学習を嫌う。1人でやった方がよほど気楽という。グループでやると人間関係がぎくしゃくする。
なかなか生活指導に結びつかない。長期的に人家右傾制をねらっていかないといけない。
何かとお茶を濁せばいいという時代ではない。
本質的に生徒は課題を持っているということを教師は知らないといけない。

＊今、なぜ総合なのか。
5年間やってくると、マンネリ化になる。マニュアルがほしくなる。昨年通りの実践が繰り返される。それに安住してしまう。常に生み出していかないといけないという教師のエネルギーが問われる。
総合とは何かを常に問われなければいけない。自分の生き方とどうかかわるかという視点から捉えないといけない。

総合学習をやった教師が自分の教科にどうかえっていくか。
新しい教科　子供の興味関心は枠を越える。教科の学習力をもっともっとつっこんでいかないといけないと思っている。教科の再編成だと思う。その後の学習指導要領はそのあたりかと思っている。
今までは自分の教科ができてほしい。これからは違う。
子供自身を総合的に捉えていく教師の－－
学校そのものが地域と通じて評価させる。

3人の提言を受けて：コーディネーター的場正美氏（名古屋大学教育学部教授）

最後には、どういう学校を目指しているのか　学校づくりを聞きたい。
やっている途中は自分たちの課題が分からない。テーマを選ぶときに果たして生徒たちに自由に選ばせてよいのかという迷い。
総合学習のテーマをどうやって、子供たちの中に発展させていくのか？

柴田：テーマは子供たちが選んできたものを大切にしている。テーマユニットでは、教師の出したものをヒントにしている。フリーユニットは生徒が自由に選んでいる。

丸山：はじめに子供有り気かどうか。これは小学校でよいと思う。忠、興味関心だけに終わってしまってはいけない。現代的な課題。答えが一つにならないところがよいところ。中高ではテーマ性は必要だと思う。

徳武：学年ごとにもっている。小学校時代の総合的な学習経験が深まってくれば、また考えないといけない。本校では、環境、情報、国際理解などは、合科型のカリキュラムの方が有効と考えている。

的場：テーマの組立がかなり違っている。自由に選んだとき、これはうまくいかないのでは？ということは？問いかけの中身を

柴田：視点を変換させるための問いかけ。何を調べたいと言っているのかを話し合う。アドバイスして引き出していく。

的場：学校の先生が変わったと言われるが、変わっていない先生はいるのか？数学の先生はのりにくいといわれるがどうか？

徳武：多くの先生はこの2，3年で変わった。学年会議が月2回あり、その一回は総合的な学習をどうするのかを話し合っている。学年間のつながりができた。評価を生徒の追求に生かすとはどういうことかが少しずつ見えてきた。学力評価、学習評価、評価の違いが見えてきた。教師のガイダンス機能を生かすことが大切。カウンセリング的アプローチがないと（？）生徒がどこで行き詰まるのか読めなくなる。プロセス評価　実際にはやりにくい。

問題解決能力を４つに分けて－－
評価を生徒の主体的追求に生かす。これは教科にも共通する。

丸山：具体的に職員室の雰囲気がどう変化したか。VTRでみる中身が変わってきた。例えば、コソボのニュース、生と死の問題など、誰かがＶＴＲを撮っているなど、変わらざるを得ない場面ができてくる。一つの生徒の見方として、教科ではこうだが総合ではこうだ。机の上に並ぶ本が変わる。数学の先生の机に環境の本など。

柴田：職員室の話題がすごく盛り上がった。どの先生ともしゃべれるようになった。総合をやってよかった。私は音楽の教師だが、それまでの研究会では、音楽は分からないから－－と閉鎖的だった。総合では子供を見る、子供の具体的な姿で話し合おうとした。子供の見方が変わったとい例の話がある。「今までは教師の側から教えていたものを、自分たちで考えなさいという授業をしたら、『先生、総合学習みたい』と言われた」と嬉しそうに話す先生がいた。

的場：柴田先生のところは会議が増えた。丸山先生は疲れるといわれた。マンネリ化する、疲れた？総合学習は疲れるか？なぜ疲れるのか？

丸山：正直な話疲れる。教科の方が楽。疲れてもなぜやるか、意外性とおもしろさが何とか我々を支えている。生徒も疲れるという。新しい教師としての生き甲斐みたいなものが見いだせたときはよかったと思う。気分が重くなることはある。子供とやっているとそうではないが。新しいことということで－－

柴田：疲れている。今までに40回という協議会をやっている。短いときは20分で終わるが延々と続くときもある。追求がどんどん進むクラスというのは、前日外へ行った次の日に子供の話を担任は聞いている。そういう時間は教師ががんばっている。先生たちが子供と一緒に出かけるときは生き生きしている。外へ行くことに対し、校長が絶対に×を出さない。

的場：評価の問題を聞いておきたい。来年研究史亭２年目の柴田先生の学校、長年やっている徳武先生の学校、丸山先生の学校は来年度から２期制。カリキュラム評価について丸山先生、徳武先生から。学校運営について丸山先生から。学習評価について柴田先生、徳武先生から話してほしい。評価をどう考えているか？

丸山：評価論、評価と評定は違う。評定は生徒をランク付けする。評価は個人に即して行うもの。総合的な学習評価をしなさいといっている。数値的な評価をしてはいけない、評価を積極的にしなさいといっている。それぞれの学校で独自に考えろといわれている。みんながわかりやすい評価の観点を出そうとしている。1．問題解決能力２．表現力３．コミュニケーション能力４．実践していく、行動していく能力
具体的な実践に移すのは難しい。コメント評価になっている。色んな形の評価活動が出されている。加算的な評価をしていくことが大切。
カリキュラム評価　総合学習の時間、大きな集合体にしてボトムアップの職場運営をしていかないとやらされるものではいけない（？？）。学校運営の質が問われるものになる。

柴田：評価についてはまだ深く話し合っていない。一応、西中版の評価の観点を考えた。生きる力として、こういう力　問題を見つける力　問題を感じる力　そういった力を20個くらい考えた。ある程度まとまってくると、どんな力が働いたかを、その子を見た。
３年生の学びの例から藤前干潟に行った子の例だが、はじめは興味を持たなかった。御台場にいって海岸に興味をもった。

的場：学校運営をどう改善して評価していくのか。

徳武：学校にとって都合のいい評価をしがち。第３者を入れることが必要と考えた。４月に保護者への説明会。学校評議会６，２月　学校評価。
カリキュラム評価、生徒の学習観を大切にしないといけない。

的場：先生方には失敗したこと、弱いところを出してほしいといってある。いじめや不登校は総合学習と関係があるかどうか。

丸山：生き方を考えれば当然深くかかわる。正直言って実践はそこまで深まっていない。総合学習は最終的には自分の人生にかかわる。自分の過去を客観的に振り返るとき、自分の過去もう一度見直すチャンスが産まれる。いじめたこと－いじめられたと。

〈フロアから〉
＊名古屋中学校の教員：50代企画委員会。運営委員会等色んな縛りがある。４時までにすべての会議を終われという縛りがある。労働強化につながる。４時までの実践の中でやるにはどうすればいいか。我々の逆の

生き方をすることになるのでは？

＊丸山先生に質問：午前中の授業で気になること－中学３年の子供が司会していた。制服のボタンをはずしたままだった。２年の授業「きりーつ、れーい」など。総合的な学習の時間　一体全体、教師の指導性は？中学３年間で指導はどうあるべきか。附属中学がどんな子供を育てたいのか？

＊移行期の総合的な学習の確保の仕方について聞きたい。2002年からは時間が保証されるからいいが、移行期にどのように時間を確保すればいいのか。長野中学では70時間とっているが、その時間の見出しかたについて。

＊兵庫県西宮　公立中学：時間割の組入れ方。それに関連して学年を基礎としているのか担任を基礎としているのか。指導の責任の問題として、担当者を教科担当にするのか。予算の問題活動費はどうしているのか。必修教科と総合学習の関係。教師の持ち時間。

行事を生かした総合学習について考えがあれば。

的場：（フロアからの意見をまとめて各シンポジストにふる）

丸山：生活指導と総合学習がどういう形で結びつくかは大きな課題。全校一斉にきちんとやらせるのが望ましいのか、長い目で見るのが望ましいのか、常に問題になる。そういうものは除いても育つものを見ていこうと思っている。
労働強化の問題は、確かに労働強化。行政サイドに要求していく必要あり。予算　国会なら多少親のバックアップあり保護者なり地域の協力をボランティアで要請

徳武：総合的な学習は重要性の高いものになっていく。学校の中に規律制がないと学校が無茶苦茶になっていくと思う。移行期の時間について12ねんどは1050時間で行く。音楽など、国語は新学習指導要領にしたがう。

柴田：時間割の組み入れ方は、土曜日のゆとりの時間を１時間。２時間目を総合学習に撮った。土曜日の１時間にすべてやろうとすると間に合わない。土曜日の１時間を火曜日の５時間目に振替可能とした。１年水曜に振替可能に。３年は金曜日に振替可能にした。その次の時間をセットとして学活のじかんとしてとった。毎回ではない。学級が基本。大きく動くときは学年。
研究協議は、土曜日のある週は木曜日の６時間目をカットし、土曜日にもっていった。木曜日は早い時間から始められるようにした。月曜日は午後の部活なし、45分授業。でも４時、５時には終わらない。今は、先生方の意欲にすがって生きている。
行事について　自然教室、修学旅行は総合学習の一貫としてやっている。

的場：帰りづらい文化も見直されつつあると柴田先生に聞いている。自分の学校だからできたということを聞きたい。どういう学校を目指しているのか？どういう学校像を描いているのか。どういうことが課題なのか。課題を明確にしてもらって終わりたい。

丸山：一番大事なことは、教師が「うちの学校、うちの生徒」という感覚を持つこと。５年くらいいないとできない。「うちの学校」を改革していくという教師の転換が望まれていると思う。それをサポートする学校運営。自分の意見が反映できる学校であるかどうか。子供像がでてくる。ピアス、茶髪をやっている生徒は総合に向いていないかというとそうでない。幅広い教師の新しい教育観が求められる。個人プレーの時代から、チームプレーの時代になってきた。教師の人間関係をどう作り上げるかが一つの課題だと思う。

徳武：長野市で問題になっているのは不登校の問題。生徒にとって学校が行きたくないところになっている。生徒にとって魅力ある学校作りを合い言葉にしている、生徒が安心して過ごせる学校

課題１．受験の問題は大きい。卒業前になると保護者によかったといってもらえるが。対応した入試になっていない。
課題２．学校によってカリキュラムが変わる。自らがカリキュラムの開発者になることを要求されていく。そこに力を入れていくことが我々にとってやらなくてはいけないこと。

柴田：西中のよいところは、みんなが分からないところ。みんな同じレベルから出発したこと。みんなでやっているというところがよいところ。うまくやろうということがない。失敗して当然という気持ちがある。子供も素直。自分の思ったとおりに行動できるところがいい。色んな規律を外した。体育館に入る入り方も考えた。外から見ると、だらだらに見えるかもしれない。ボタンのはずれた子、茶髪もいる。その子たちと

アイコンタクトもとれる。俳句もやっている。教科で子供一人一人の感性を磨くこともやっている。総合だけでなく、子供一人一人を浮き出させていくことをやっている。
一人一人の子供を見ていこうということを続けていきたいと思っている。（総合学習について短歌でつづる総合学習の紹介あり）

中村：司会者も何か言えと的場先生に言われたので。５年前はフロアにいた。将来計画委員会に参加した。お年寄りの時代でなく、若者の時代。（当時、話を聞いて）メモを書いたものは忘れた。感覚だけが残っている。聞いた感覚は残っている。今聞いた感覚を大切にしてほしい。

高校シンポジューム
「総合学習の在り方をめぐって」

コーディネター；植田健男
（名古屋大学教育学部助教授）
提案校；「生徒の興味関心と総合学習の成立」
池上東湖先生　（大東学園高等学校）
「『産業社会と人間』と総合学習」
服部次郎先生（筑波大学附属坂戸高等学校）
「総合学習と進路指導の関係」
矢木修（名古屋大学教育学部附属中・高等学校）
司会；斉藤眞子
（名古屋大学教育学部附属中・高等学校）

斉藤；午後の高等学校シンポジユム「総合学習の在り方をめぐって」をはじめさせていただきます。はじめにコーディネーターの植田健夫先生をご紹介いたします。次に提案校３校の先生方を紹介いたします。まず最初に大東学園高等学校池上東湖先生です。次に筑波大学附属坂戸高等学校服部次郎先生です。三人目は本学名古屋大学教育学部附属中・高等学校矢木修でございます。だだいまからシンポジュームを始めるにあたりまして、各提案校の先生方に総合学習にどのように取り組まれているか、概要を発表していただきますのでだいたい１校20分程度を予定しております。よろしくおい願いいたします。それで、始めるにあたりまして先生方のお手元に質問用紙というものをお配りしてございます。各発表校の内容についてご質問等があれば、後半のディスカションの所で先生方に答えていただきたいと思っております。また、総合学習の在り方をめぐってということでありますので、先生方がお考えになっているテーマについて、今回のシンポジュームで取り上げる事ができると思います。そのようなご意見をお書き願いたいと思います。で、３人の先生方の発表の後にコーディネーターの植田健夫先生からもご提案がございます。だいたい１時間少しを目安にしておりますけれども、そのあと10分ほど休憩を取りますので、その時にまでにお書きいただいて、私、司会の所までお寄せください。その中から何点かを後半のディスカッションテーマとして取り上げていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。最初に大東学園高等学校池上東湖先生より御願いいたします。

池上；大東学園高等学校の池上ともうします。袋の中にレジメを入れておきましたのでそれを見ながら聞いていただけたらと思います。あの、私たちの学校は、東京の世田谷にある私立の女子校なんです。うちの学校は、その部分見ていただければ分かると思いますが、少し歴史的な経過がありまして、いわゆる、今はもう偏差値が無くなったんですけれども偏差値がある時代はですね、東京の私学が240校ぐらいあるんですけども、そのピリッケツに位置した学校なんです。私は数学を教えているんですけれども、一時生徒が多い10年ぐらい前ですね、600名ぐらい入ってくる生徒の350人ぐらいが数学が１の生徒がいたんですね。ある福島の私学の先生に聞いたらこれは福島全体の数学の１の数ですよと言われことがあるんですが、そうゆう中でやってきました。それで今はですね、偏差値が表面上はなくなったものですから、少し教師も生徒も明るくなっている学校なんです。私たちの学校は、経過のことは後で話しますが、96年から学校完全５日制にしました。それに伴ってカリキュラムも変えて総合という授業を入れました。その総合は、私たちの定義ではですね、こういうもの、資料の３頁にありますけれども、「一つの教科では追求しきれない社会や生活に関わる現代的テーマを調査・研究・発表・討論などの様々な方法も取り入れて学習していくもの、推進は幾つかの教科がチームを作って進める。」こういうような定義で始めまして、あの、各学年１単位でですね。１年生では『性と生』というテーマで。２年生では「平和」これは11月に沖縄に修学旅行へ行くものですから、それの事前事後をかねてですね。それから３年で「女性と人権」というテーマでやっています。これで、96年からしましたから、ちょうど今年で４年目を迎えているところです。それで私たちが何故この総合・・総合はですね。テストをしない。それから評定を付けないと言うことで始めています。じゃー単位はどうするのかということですけども、単位は認定か認定しないかといこうで、これは出席点と後は各教科いろいろな形があるんですけども発表を１年の終わりにはして、それで終わりにするといゆ形にしています。その発表の